

編集室から

私事で恐縮ですが、我が家ではなぜか5月生まれが多く、私と丈母(義母)から次男と続き、婿殿、そして初誕生を迎えた孫も加わり5人となりました。そして、私は遂に還暦。ところが、本人は全くその自覚が湧いていません。

当初、温泉旅館で家族総出にて大いに祝おう!と入れた予約も、この騒ぎで自粛。赤いちゃんちゃんこで家族写真というお決まりの行事も飛び、自覚を得る機会も無くなりました。

そんな折、年金機構から予定年金額の通知が届きました。65歳からの支給額と、70歳に先送りした場合は、後者が金額的にお得な印象。試算してみると82歳で分岐点となるようです。つまり、82歳より短命なら早く貰い始めた方が総受給額が多く、長命なら遅らせた方が多くなります。さて、自分の寿命は何歳か?そんなことは分かるはずもなく、どちらを選ぶか数年考える時間を頂いたような気分です。

こんな呑気なことを呟いて居られるのも、身の回りに今回の感染症に「陽性・疑い」の人が幸いにも全く出ていないからです。一方で、医療関係者の方々をはじめ、日々最前線で活動されている方々の緊張感、自粛要請が解除された後も続くことが考えられます。今まで以上に感染拡大防止策を、草の根的・自主的に採り続けることが、その方々への敬意と配慮につながると痛感させられます。

今月の表紙写真は、ご寄稿を頂いている井垣先生が、昨年6月に開業された際の一枚です。一年前の今頃、これほど地球規模の事態が起こるとは夢にも想っていませんでした。

先のことは一切判らぬのが人間であるならば、寄せる波を掻き分けて前進するしかありません。還暦という「生まれ直し」に際して、改めて世のお役に立ちたいものと、初心を思い出しています。(は)



のと
だらばち

本ニュースにレギュラー執筆していただいている川島さんが「能登だらばち」を引き受けて改装開店されました。

上京された際、ご利用になってみてください。

のと だらばち
03-5537-3078
17:00~23:00 日曜祝休

中央区銀座8-4-27
プラザ銀座ビル地下1階
(銀座外堀通りasics前)

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2020/06
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217
Fax 076-233-7375
Email usric@neting.or.jp

2020/06
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

水意月



香川県高松市にて
本ニュースレターご寄稿の
井垣俊郎先生ご開業の様子
by hama

幸いなことに緊急事態宣言は有効でしたが、社会経済への影響も深刻でした。このような自粛を再々繰り返すことは、現実問題として厳しいでしょう。これからは、ウイルスとの共存を模索する段階 (ウィニコナ) です。五月二十日時点の状況をまとめました。

PCR検査は必要だが感染の実態は判らない

このウイルスは誰が感染者か分からない感染するとしびしい基礎疾患があると肺炎のリスクが高まる 突然重篤化する、という稀な特徴が重なってパンデミックになりました。、に対しては、いくら医療者が頑張っても特効薬がない以上は限界があります。そうなる、を何とかするしかありません。解決策は一つ、検査で感染者を見つけて出すことです。現時点で最も精度の高い方法は、PCR検査です。試薬の調達とドライブスルー方式が安定すれば、検査件数も増えるでしょう。でも、この検査にも限界があります。前々回も述べましたが、『感染者は発見できるが、非感染の証明はできない』という点です。陽性と判定されたら、九十九%以上の確率で感染者です。しかし、陰性の中にも感染者が紛れ込んでしまいます。他の検査法に比べれば少ないとは言え、感染者の三人に一人は陰性と判定されてしまいます。原因は、ウイルスのRNAが検体採取や輸送などで壊れてしまうからです。そもそもRNA自体が脆いものなので、工夫にも限界があります。ただ検体を唾液にすれば採取する側の感染リスクは低下するので、そうし

た改良は進むでしょう。

PCR以外では、インフルエンザの簡易検査と同じ原理の抗原検査も開発されてきました。しかし簡便ではあるけれど、精度は落ちます。非感染を証明出来ない点も同様です。抗体検査は全く用途が違って、感染から数週間たって出てくる抗体を調べるので、過去を振り返って感染状況を検証するには有用です。いわば、未来の為のデータ集めです。ウイルスは便中にも出てくるので、下水中のウイルス検査も一部で始められています。これも、未来の為のデータ集めです。

第二波・第三波は防げないのか：

現時点では、無症状や軽症の感染者を全て検査で見つけ出すことは不可能と言わざるを得ません。

このまま緩み続ければ、第二波・第三波の襲来は確実です。そうなる、と病院や高齢者施設での集団感染を阻止する事は至難の技ですし、若い人も低い割合ながら重篤化するでしょう。そう考えると、明確な基準を作って皆が納得したうえで、感染の波を最小限に抑えるよう自粛と緩和を繰り返しながらワクチンが特効薬の開発を待つしかない、というのが残念ながら現時点での見通しです。

3指標全てクリア		1つでもクリアできない場合
1~7日目	8日目以降	
		
黄色	緑色	赤色

出典：5月9日 産経新聞



【プロフィール】
(いがき としお)金沢大学北潟寮で、濱さんの二年後輩でした。濱さんは、とつても怖かった。卒業後は金沢を離れ、現在は温暖な讃岐高松でヌクヌクしています。

濱の起業塾 十四 『検証』

起業の志を立て、機会を掴んで具体的な着想を得、本格的な事業化の可能性とノウハウを獲得するための試行を経て、それを検証するという流れを紹介し、前号で起業の成否は熱量に拠ると紹介した。

一方で、想いが強いと、それを成就させたいという意識も自ずから強くなる。これが試行 検証という場面で、完べき主義として発露してしまうと、逆に超えられない境界を生むことがある。

技術系の起業家に比較的多い反応だが、事業内容が未だ完璧に至っていないことを理由に、社会に提供することをためらってしまう。自動車という製品は、最初からレクサスを産んではいない。馬車に動力を付けたものから始まっているに過ぎず、長距離移動は、過酷だったと想像できる。

スマートフォンも、最初は電話機能がなく、音楽データの再生機から進化していった先に登場し、タブレットという新カテゴリをも産んでいる。

もちろん、完璧を目指すことは素晴らしい。しかし、いきなり最初から完成形を提供できるという傲慢さが垣間見れはしまいか。さらに、その指向によって起業機会そのものを逃してしまつては、元も子もない。

事業を動かしながら、提供側のノウハウやマンパワーを積み重ねて、提供レベルを上げていくアプローチの方が、真摯で謙虚ではないか。自動車の発展は、このアプローチである。

スマホは、その発展を見るに、最初からビジョンとしてスマホ・タブレットが構想されていたように感じる。終着点を描き、それを実現する技術が登場するまで、その手前に市場を創り、進化させていくアプローチ。途中の市場には、音楽配信・アプリ市場があり、導くためのブランドディングと共に歩んでいる。

北アルプスの険しい登山道を思い描いて欲しい。右も左も急峻な谷へと落ちていく。その間の細い尾根筋に一本の道が連なっている。経営の道とは、そんな山道のようなものかも知れない。右は、樂觀主義という滑落斜面。左の谷筋は、悲觀主義という落とし穴。渡りきるには、どちらに寄り過ぎないバランス感覚が要る。

江戸時代の商人で、後の三越百貨店や三井銀行の元となった三井財閥・中興の祖である三井高利のことは、数百年の時を経て尚、仮説 検証の繰り返しである起業・経済活動の真髄を突いている。

樂觀的に、将来を構想せよ
然る後に、悲觀的に最悪の状況を想定し
その上で、樂觀的に行動せよ

青森県出身で一番読まれている作家といえば、太宰治(津島修治)であろうか。今年は生誕111年にあたる。今も東京都三鷹市禅林寺での桜桃忌には太宰ファンが訪れるという。この4~5月に太宰に関するニュースが3点あった。

先の4月20日、太宰の長女である園子さんが亡くなった(78歳)。園子さんに太宰を重ねる人も多かったのではないかと。次女で作家の佑子さんは2016年2月(68歳)に亡くなっており、お二人の出身は太宰が最後に過ごした三鷹になっている。園子さんの夫は元厚生大臣、長男は現青森1区の衆議院議員である。太宰の兄の文治は元青森県知事、衆参の議員でもあり、いまでも青森県、とりわけ津軽(主に夏泊半島から西の地域)では「津島」ブランドが強い。

千葉県船橋市の太宰ゆかりの宿が4月30日閉館(1921年創業・楼閣風の木造建築、国の登録有形文化財指定)。太宰が船橋市に1年3ヶ月住んでいて、この旅館には20日間ほど桔梗の間に滞在し小説を執筆したという。JR船橋駅の南側には太宰治の旧宅跡、文学碑などがある。

秋田さきがけ新聞(5月1日と2日)にゴールデンウィークに「大人も、子どもも家で読みたい5人の名作」に「走れメロス」が掲載され、40数年ぶりに読む。確か、中学校?の国語の教科書に全文が載っていて勉強をした記憶がある。太宰の地元を通るストープ列車の「津軽鉄道」の車両にも「走れメロス号」がある。

青森県のシンクタンクに在籍していた2002年3月。最期の業務が地元デザイン会社とのコラボによる「太宰ロード」マップ作成の業務(当時の青森県観光課からの委託)。おそらく、文学者の足跡を地図化し発行することは、青森県では初?であった。実際の作業は、小説「津軽」、「思い出」などに出てくる青森県内の名所、文学碑などをめぐり数行のコメントを書き写真を撮影するものであったため、改めて太宰の小説などに目を通し各地をフィールドワークした。

太宰に関する記念館を紹介すると

太宰治記念館「斜陽館」(五所川原市金木町)。太宰の生家。明治に建築された地主の豪邸であり、旅館となっていたが現在は博物館に(かつて1度宿泊した)。和洋折衷の入母屋造りの建物は国の重要文化財建造物に指定。

「小説・津軽の館」(中泊町小泊)。太宰の乳母である越野タケさんと小学校の校庭で運動会を見る像がある。この一説は「津軽」に記されたシーンである。その他、青森市には青森中学時代の「学生時代の下宿地」の碑、弘前市には弘前高校時代に下宿していた「太宰治まなびの家」が残存する。文学碑は五所川原市金木町の日本のさくら百選にも選出された「芦野公園」、外ヶ浜町蟹田「観覧山」や「龍飛崎」、弘前大学内、青森市中央市民センター前など、津軽地方の随所にある。太宰ファンには「津軽」などを片手にのんびりと巡ることをお勧めしたい。

子ども達の学校が休みになってもうすぐ3か月近くたちます。6月1日からは3日に1回の登校というスタイルから学校が再開しますがこの休校期間で保護者の多くから問い合わせがあったのが、『目黒区の公立小学校ではon-line授業はしないのですか?』というものでした。

確かに、私立小では休校期間中もタブレットをブラウザーにした授業が実施されており、多くの保護者から『教育格差がつく』という声も出ていました。能登生まれ能登育ち、周りには鼻垂らした子供ばかりで公立しか存在しなかった僕としては、私立行けばよかったんじゃないの?公立行かせようと思ったのあなたでしょ?と言いたいところを少し我慢しつつ、on-line授業導入に関する障害についてこの3か月で感じたことを羅列してみたいと思います。

1.環境の不備

- ・PCやタブレット端末で子どもが専用で利用できる環境となっている家庭は少ない。目黒区も22校で440端末の貸し出しをしていましたが全く足りません。
- ・保護者でもネットリテラシーが高くない世代も多く、子供が教材の動画を見ようにもそこにたどりつけなかったという話も聞きます。

2.コンテンツ力の問題

教員個々のスキルに依存するため担当教員や学校ごとに差が出てくると思われます。また小学校の教科書を見るとわかりますが、教室での授業を前提としたつくりになっています。教科書+補助教材が必要であり、on-line対応となると教科書の仕様から再構築が必要です。

3.教員の負荷が増大

授業コンテンツの作成もそうですが、教室での授業と異なるので児童1人あたりへの対応により負荷がかかります。教員の働き方改革が叫ばれている中で逆行する取組は果たして推進されていくのか?というのは甚だ疑問です。

4.外からの視点がない

渋谷区はIT企業とタイアップして独自にon-line授業を開始しました。ただ多くの自治体では、外からの視点というのが皆無です。皮肉にも新型コロナの拡大で、大人の働き方改革とともに間違いなく学び方改革が求められます。子供の教育フィールドという魅力的なマーケットに関心を示す企業も少なくありません。それを判断する目利きを持つ人材が自治体に少ないというのが現実でしょう。

新型コロナの第二波への対応はもちろんですが、昨今の不登校児童増加傾向という事実も捉え、今こそ自宅でも十分学べる機会を学校や教員任せにするのではなく国や東京都で推進してほしいところです。『スマホを子供に持たせるなんてよくない!!!』と言っている区教育委員会の方々では到底実現できません。"子供は国の宝"ですが、今はまだ原石の状態。原石を磨いてそれぞれが個性ある光輝く宝石になるためにも、過去の歴史や忌まわしき伝統にとらわれることなくソリューションを提供していく事こそが、アフターコロナ時代における新たな教育システムだろうなと感じるこの頃です。

